

“壁画家は日当で働く”

ーディエゴ・リベラ、壁画の報酬

1931年10月にパリを出発し、南米ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、ペルー各地で個展を開催、成功を収めた藤田嗣治（1886-1968）は、翌年11月にメキシコに到着、1933年3月にはタスコの野外美術学校に北川民次（1894-1989）を訪ねている。

その時の印象を藤田は次のように語っている。

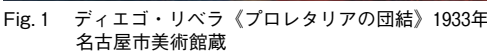
「北川君一人が校長であり、小使であるわけであります。学校の生徒は、白い木綿の布のシャツと股引きだけで、全部裸足であります。北川君は先生だけにズックの靴が何か履いておった。まるでルンペンが何かの集まりのように見える。」

「ルンペン」呼ばわりされた民次は、前年1932年の秋にこのタスコに移ったばかりで、

それ以前、1925年から七年間に及ぶトラルバムの野外美術学校では、「小使い」として日当3ペソで生活していた。当時の生活について、民次は次のように回想している。

「実際、一日三ペソの日給ではやり切れなかった。私の給料袋は貰った日のうちにたちまち空になった。まず食料品店の借金を払ってしまうと、私はどうしてもたったひとりで、がらんとした学校に居残る気にはなれなくて、ポケットに残った数ペソを鳴らせながら、夜の都の場末へさまよい出ずにはいられなかった。」

メキシコに到着したばかりの藤田によると、当時のアメリカ（ドル）とメキシコ（ペソ）の換金率は、1 US\$≒3.20～3.50MXP。また、当時の物価の一例を挙げると、タスコ

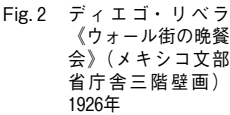


の野外美術学校が創立に当たって支出した材料費のうち、木版画用の1m四方の板が4ペソ、木彫用丸ノミ、角ノミが各々1ペソであった。

だが、一日3ペソという低収入に対して、民次が“辛抱”できた要因には、当時のメキシコの芸術家が置かれた社会的背景があった。

「しかし、ちょうどそのころメキシコの文部省で壁画を描いているディエゴ・リベラは、一日五ペタだったし、その他オロ

カの壁画《征服、独立そして革命》を完成したリベラは、カーロとともにサンフランシスコを訪問している。その後、メキシコ・シティの大統領宮正面階段壁画を完成させるために帰国する1931年6月8日までの七か月間にリベラがアメリカで制作した壁画は、以下の通りである。



- ・ 1930年12月 スミス大学美術館、ノーザンブトン、マサチューセッツ
《市場風景》 可動パネル 1.24㎡
《ジャガーの仮面を被った戦士》 可動パネル 1.4㎡
- ▷ 1930年11月 サンフランシスコで展覧会を開催（11/15～12/25）
- ・ 1930年11月～1931年2月（6週間） サンフランシスコ株式取引所
《カリフォルニアの寓意》 階段壁画 43.82㎡
- ▷ 1931年2月 デトロイト美術館で展覧会を開催（2/17～3/16）
- ・ 1931年4月（1か月） シグムント・スターン婦人邸、パークレイ、カリフォルニア
《静物と花咲くアーモンド》 可動パネル 4.20㎡
- ・ 1931年4月30日～6月2日 カリフォルニア美術学校、サンフランシスコ
《街の建設を描くフレスコ画の制作》
アトリエ兼展示室 フレスコ 61.15㎡

さすがにアメリカでは、壁画制作を依頼するにあたって、依頼主はリベラに対して、日当で支払うことはなく、すべてが委託制作という契約で行われている。メキシコでは一日5ペソだった彼の日当は、ドル建てで支払われた。

例えば、サンフランシスコ株式取引所では、1,000\$、1,800\$、500\$と三回に亘って報酬を受け、パークレーの個人宅では、800\$、250\$を、美術学校の壁画では2,500\$を受けとっている。またこの年1930年には、カリフォルニアのパトロンによって彼の絵画作品が購入され、その額は8,000\$を越えていた。

美術館そして私—
(80年代からミレニアムへ)

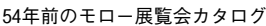
モロー展からパリのモロー美術館まで

美術家 山本富章

前回の80年代と真ん中から時間を戻して
 みたい。戻りすぎかもしれないが、美術館
 と私の関わりが始まるのは文化会館と呼ば
 れていた愛知県文化会館美術館が最初で、
 現在のオアシスがある場所に文化講堂と隣
 あっていた。記憶に残る展覧会はいくつも
 あるが、1965年中学を卒業する少し前に見
 た「モロー展」の印象は特別でチケットと
 カタログは今でも大切にしている。高校で
 は美術部に入ったが夏休みには大王崎のあ
 る波切に2泊3日で写生旅行があり先輩た
 ちの姿に驚いた。恒例の明美展には、さほ
 ど遠くない高校からリアカーに仮縁をつけ
 た作品を載せて部員と一緒に美術館まで運
 び、そのころウナギの寝床と呼ばれていた
 県美の細長いギャラリースペースで美術部
 の展示をしていた。先鋭的な活動をしてい
 た加藤好弘氏や山田彊一氏は聲咳に接した
 ことのある高校の大先輩であるが、美術部
 であったのか確かめたことはない。美術館
 展示室に上がる東西の階段脇にブルデル
 の立像が並ぶエンタランスは気持ちのいい
 空間で、芸大の卒業・修了制作展などもこ
 こ県美で開催されていた。

大学院研修科を終えるころ（1976年春）ヨーロッパを訪れる機会があった。パスポート写真はネクタイ着用で、1ドル360円で外貨持ち出し制限がまだあった時代だ。南回りでギリシャから西洋美術の歴史の流れをたどるように各地を巡って行けたことは幸運だったと思う。旅の始まりにア

テネからバスに揺られたどりで着いた地中海を望むスニオン岬で目にしたポセイドン神殿の柱列の光景は私のその後の作品表現につながっている。イタリアを経てパリに入るが、ルーブルに行かなくても「モロー美術館」だけは訪れたいと思っていた。アカデミーでルオーやマティスを育てたモローであったが、死後フランス政府に寄贈された美術館の初代館長はルオーであったという。大きな高窓のガラスから差し込む柔らかな光が広がるアトリエの空間にはかつて目にしたものも含めていくつもの華麗な作品が掛けられている。スケッチ版と呼ばれる板に描かれたエスキース群は窓際のカウンターにあり、サロンに発表した大作よりもはるかに小さいけれども伸びやかな画面は抽象表現の広がりを持つ純度の高い絵画そのもののように思えた。一群の板に描かれた絵具の堅牢さと輝きに驚き、大学を離れ版画の刷り師をしながら自らの制作に悩み続けるなか、油彩からアクリル絵具への転換は基底材を合板に変更することで可能性はさらに高まるのではと考えた。初めてモロー作品と出合ってから10年以上を経て彼の美術館で見た板絵は私に新しい視点を与えてくれ自作パネルを使った制作が始まっていくことになる。



時の話題

デジタル時代の美術館

このところのテクノロジーの進化には驚かされています。そして、その変化のスピードはどんどん速くなるばかり。わたしたちの生活スタイルも急激に変化しています。最近、タブレット型の電子書籍リーダーを購入して、電子書籍で読書をするようになりました。私にとってはやはり長年親しんできた紙の書籍のほうが圧倒的に読みやすいのですが、お試し料金の安さにひかれて本の読み放題のサービスに加入してみたところ、クリッ

クするだけで本が読めて、読めば読むほどそのデータをもとに自分好みの本をオススメしてくれるので、いつの間にかすっかり愛用するようになりました。おまけに電子書籍リーダーには読み上げ機能というのがついていて、それを使えば、オーディオブックとしても楽しむこともできます。

最近は、音楽や映画やドラマもサブスクリプションサービスで好きな物を好きな時間に視聴するものになっています。聞きたいCDがどこかに行ってしまったとか、レンタルしたDVDを返しそびれて延滞料金を払うこともなくなりました。映画館には時々行きますが、自分の都合に合わせて見る時間や媒体を選ぶことができるネット上のサービスは快適

です。

様々な情報や娯楽がネット上におかれ、それらを必要な時にそれぞれがデータで楽しむものとなっていく中で、作品という物体を扱う美術館の在り方にも変化が求められるようになるのでしょうか。昨年11月に東京で開催されたパネル・ディスカッションでMOMAの館長が「デジタル時代において、コレクションの考え方を変えなくてははいけません。(中略) コレクションへの投資を撤退することも考えています。」と発言されたという記事※を読みました。これまでミュージアムにおいては決して疑問視されることがなかったモノを集積していく役割について、世界をリードする大きな美術館の館長がこのように発言さ

れたことに衝撃を受けました。しかし将来、人間の感覚器でとらえられる現実の世界が、VRやARの空間と区別のつかないレベルになっていくとしたら・・・？現物のモノを体験する価値はより上がるかもしれませんし、現実空間にとらわれない新たな作品やヴァーチャルミュージアムといったものが生まれたりする可能性もあるでしょう。これからどんな世界が待ち受けているのかはわかりませんが、ミュージアムの在り方も大きく変わっていくのかもしれません。(hina)

※「コレクションの考え方を考えるべき」MoMA館長らが登壇のシンポジウムがアカデミー・ヒルズで開催
美術手帖 <https://bijutsutecho.com/magazine/news/report/18836>

1931年6月、メキシコ国立宮殿の壁画を完成するために帰国したリベラは、果たして、サンフランシスコでの壁画プロジェクトの報酬金でメキシコ・シティのサン・アンヘル・インに、住居とスタジオを兼ねた邸宅【Fig. 3】の建設を始めている。

因みに、藤田のメキシコ行きには、「パリで最初に知り合いになった」ディエゴ・リベラを訪ねるという目的もあったようだが、この時期リベラは上記のようにアメリカに滞在して居り、二人はすれ違いに終わった。それでも藤田は、1933年の1月には早速、主の居ないリベラの新築された邸宅を見学に行き、記念撮影まで行っている。

同年10月に国立宮殿の正面階段の壁画を完成させたリベラは、翌11月には再びアメリカを目指した。

ニューヨークでの挫折と《アメリカの肖像》
名古屋市美術館が所蔵するディエゴ・リベラ《プロレタリアの肖像》(1933年)【Fig. 1】は、二度目のアメリカ滞在の最後、彼が体験した栄光と挫折の末に描かれた。リベラの二度目のアメリカは、未だメキシコで宮殿の壁画を完成に向け制作していた9月にその“縁”が生まれた。1927年5月1日、モスクワで「メーデーの日」を迎えたリベラが、現地で描いた45点の水彩画が、ニューヨークの女性コレクターによって購入された。絵画作品、それも水彩画としては破格の2,500\$で購入したその人物こそ、ジョン・D. ロックフェラー二世の夫人アビー・アルドリッチであった。二度目のアメリカで、ニューヨークに至るまでのリベラの行程は次のようなものとなった。

▷1931年11月 13日、リベラ、ニューヨークに到着。
・1931年11月 ニューヨーク近代美術館での個展のための壁画
中央中庭 (26枚パネル) 433.68㎡

展覧会の舞台裏

「タイトルをどうするか その2」

前回に続き、展覧会のタイトルについて考えてみたいと思います。モネやゴッホのような誰でも知っている著名な作家の個展であれば、あまり細かいことを考えずに、とにかく名前を大きく前面に出すという広報が効果的ですが、昨年の「モネ それからの100年」のように、モネと現代美術を組み合わせた、やや複雑な構造を持つ展覧会の場合は、内容を理解していただき、なおかつ関心を持っていただくためには一工夫も二工夫もひねったタイトルが必要になります。一方、知名度がそれほど高くない作家やグループ、コレクションを取り上げる場合は、さらに高度な工夫が要求されます。最近の具体的な例をあげて考えてみましょう。

昨年12月から今年2月にかけて開催した「アルヴァ・アアルト」展では「もうひとつの自然」という言葉がタイトルの一部として付けられていました。アアルトは建築やデザインに関心を持つ人々の間では大変有名な存在ですが、それ以外の一般の方々にとってはほとんど馴染がない作家ではないかと思えます。ですから名前を前面に打ち出すだけでは、あまり多くの入場者は期待できません。ストレートに「近代建築の巨匠」というような形容詞を付ける方法もありますが、この場合も建築に関心のない方にはあまり意味がありません。アアルトをご存知なく、なおかつ建築にもそれほど興味が無い方に、何とか美術館

《農奴の解放》《さとうきび》(二枚パネル) 可動パネル 4.5㎡
《農民指導者サバタ》 可動パネル 4.5㎡
《戦うインディオ》 可動パネル 1.4㎡
《圧搾空気ハンマーで穴を開ける》 可動パネル 4.5㎡
《武装蜂起(兵士と労働者)》 可動パネル 1.4㎡
《電気溶接》 可動パネル 4.5㎡
▷1931年12月 ニューヨーク近代美術館で展覧会を開催(12/23～1932/1/22)
▷1932年4月21日、リベラ、デトロイトに到着。
・1932年7月25日～1933年3月13日 デトロイト美術研究所《デトロイトの産業(人間と機械)》
中央中庭 (26枚パネル) 433.68㎡
▷1933年3月20日、リベラ、ニューヨークに到着。

ニューヨーク近代美術館での個展では、57,000人の入場者を数え、デトロイトでの完成一般公開では10日余りで86,000人の観客を集めた。成功と名声、そして20,000\$を越えるデトロイトでの報酬を手し、リベラは颯爽とニューヨークへと舞い戻った。

・1933年3月～5月9日(未完成) ロックフェラー・センター RCA (Radio Corporation of America)ビル、ニューヨーク
《新しくよりよい未来を選択するために、希望と高い理想を持って十字路に立つ人》
ホール、エレベーター部分壁画 93.68㎡
・1933年7月15日～12月5日 新労働者学校、ニューヨーク
《アメリカ合衆国の肖像》 可動パネル (26枚) 65㎡

ロックフェラーからは、リベラに対してデトロイトの額を越える21,000\$が提示された。壁画制作は、3月に始まり、24時間体制で5週間の工程が組まれた。4月24日になって、RCAビルの壁面にリベラがコミュニストの肖像を描いていることがマスコミによって伝えられた。それがレーニンの肖像であった。ネルソン・ロックフェラーは、リベラにレーニンの肖像を他の誰かに描き替えるよう依頼したが、両者の確執が埋まることはなかった。1933年5月9日、RCAのマネージャーはリベラに解雇を伝え、当初の報酬の三分の二にあたる14,000\$の小切手を手渡した。

ロックフェラーによる解雇に続いて、シカ

まで足を運んでいただき、その素晴らしさを知っていただくためには、相当に知恵を絞らなければなりません。多くの方に理解可能で、展覧会の内容を正確に伝え、簡潔で、目でも耳で聞いても印象に残るという、いくつかの高いハードルを越える表現が要求されます。そうして選ばれたのが「もうひとつの自然」という言葉でした。

これはアアルトの建築理念が、人工的なものによって自然を克服するのではなく、自然と豊かに共生することをめざしたものであることを伝えるために選ばれた言葉でした。アアルトをご存知ない方に、この言葉だけでそれを伝えるのはもちろん無理な話なのですが、柔らかな言葉の響きと「自然」という文字によって、冷たく無機質なイメージとは正反対の、人間的で温かな何かを感じていただくことができたのではないかと考えています。このタイトルが功を奏したのかどうかは分かりませんが、最終的に1万8千人を超える入場者をお迎えすることができました。アアルトの知名度と建築というジャンルを考えると、かなりの健闘をしたのではないかと主催者としては評価しています。もちろんタイトルだけではなく、会期後半に向かい入場者数が増加したのは、展覧会全体に対する来館者の方々の印象が、大きく影響していると思いますが、一つ一つの努力の積み重ねが結果に結びつくことは主催者にとって大きな励みとなります。たかがタイトル、されどタイトル。展覧会の魅力を一人でも多くの方々に伝えるために、これからも一つ一つの言葉を大切に、そして慎重に選んでいきたいと思えます。(F)

ゴ万博への出展等、リベラに対するオファーが相次いでキャンセルされる中で、リベラはそれでもニューヨークに止まり、ロックフェラーから支払われた資金をアメリカに還元するために、新たな壁画制作のための場所を探した。やがて、パーク・アベニュー／西51丁目にあった〈新労働者学校〉を見つけ、RCAビルでの壁画制作を務めた助手たちは、ニューヨーク中のフレスコ壁材をかき集めた。リベラは壁画のテーマをアメリカの歴史に求め、労働者のために描くことを決めた。7月15日から制作が始められ、21点の可動パネルによる壁画が、およそ五か月を費やして完成された。

《アメリカの肖像》は、「植民地時代」、「独立戦争」から、「ニューディール政策」「恐慌とデモ」までの16点からなり、それぞれが、統治者と奴隷、資本家と労働者が対抗する構図で描かれた。その他の5点には、国際社会に迫る脅威＝ファシズムとナチズム、その両



Fig. 3 リベラとフリーダ・カーロのアトリエ兼住居 (1932年竣工)、メキシコシティサン・アルヘル・イン



Fig. 4 ルシエンヌ・ブロック《壁画『アメリカの肖像』部分、新労働者学校内部北壁》

感想ノートから

アルヴァ・アアルト もうひとつの自然 2018年12月8日(土)～2019年2月3日(日)

フィンランドの建築家アルヴァ・アアルトは、木やレンガといった自然の素材を用い、周囲の環境と調和する建築作品を手がけました。また、建築のみならず、家具や照明器具、ガラス器、ドアの取手に至るまで自らデザインし、空間全体を総合的に捉えていました。今回の展覧会は、日本では20年ぶりのアアルト作品の包括的な展示となりました。感想ノートには展示を見た方々が様々な印象を綴って下さいましたので、ここで一部をご紹介します。(AN)
一病室の模式部屋が視覚的に分かりやすかったです。照明が素敵でした。反射光を利用した光の演出が好きです。穏やかでやさしい光っていいなと思いました。
一絵画の展示とは違う展示も興味深くて楽しかったです。
一美術一建築一社会一生活・・・全てつながっていると再認識。
一自然との関わり、暮らし、日常にあるもの、生活を改めて見直したいと思えるような展示でした。
一今までは建築のイメージしかアアルトに

者に挟まれながらも、大きなレーニンの像を中心に団結し、対抗するアメリカのプロレタリアの肖像が「ヒロイック」に描かれた。【Fig. 4】

材料費、滞在費、助手たちの賃金を支払って、リベラはアメリカで稼いだ財産を壁画《アメリカの肖像》の制作で使い果たしたという。壁画《アメリカの肖像》を完成させた12月4日の深夜、ラジエーターの上に座り込んだリベラは、明らかに疲れていた。【Fig. 5】

12月8日から三日間、一般に公開され、夜にはリベラ自身による講演も行われた。12月20日、リベラとカーロはメキシコに向け出港、およそ2年2か月ぶりに我が家に戻った。カーロによると、メキシコに戻ったリベラは体調を崩し、ふさぎ込んで、数か月の間制作はできなかったという。それに追い打ちをかけるようにニューヨークでは、1934年2月9日、RCAビルで封鎖されていたリベラの壁画は破壊された。

最後に余談。リベラのことに関しては、やけに詳しい藤田によると、リベラには壁画を制作するにあたって、ある「ルーティン」があったという。制作を始めるにあたって、毎朝リベラは足場の立に上ってピストルを撃っていたそうである。さすがにアメリカでは、その「ルーティン」が実行されることはなかったが、ニューヨーク、とりわけロックフェラー・センター RCAビルの現場では、さぞかし“発砲”したかったことだろう。(J.T.)



Fig. 5 ルシエンヌ・ブロック《ディエゴ・リベラとフリーダ・カーロ、ニューヨーク新労働者学校、1933年12月4日深夜》

持っていませんでしたが、よりよい空間のため、家具、照明、素材にいたるまでアアルトがこだわり抜いていたことを知りました。
一「もうひとつの自然」ということばに込められたメッセージに感動しました。人間を中心としたモノづくりをしながら自然であることはすごいと感じました。
一アアルトの自宅を見学した時のことを思い出しながら興味深く見させていただきました！
一わたしはもともとふくデザイナーになりたいと思っていたけどアアルトさんの作品を見たらデザイナーとけんちくかになりたいと思いました。アアルトさんすごーい！
一IKEAの照明シェード、椅子(先日購入)に、アアルトの片鱗を見た気がします。
一トレペで図面起しをする、この手のぬくもりこそ職人の技である。現在のパソコン、3Dでの乾いたデザインモチーフにない味わいは、もう21世紀の建築には必要ないのだろうか・・・。
一2階の展示の椅子が何個も重ねてあるものがあって、それが面白いなと思いました。
一木ってああやって曲げるんだ!! って思いました。
一何気なく北欧が好き、家具が好きで見に来ましたが、造り上げることへの情熱や、自然を愛する気持ちが伝わりました。家にある家具たちを今いちど、大切に使っていこうと思いました。

展覧会 現在進行形

あいちトリエンナーレ2019 2019年8月1日(木)～10月14日 (月・祝)

今年はいちトリエンナーレが開催される年です。2010年にはじまった3年毎のトリエンナーレ形式の芸術祭もすでに4回目を迎えます。毎回新たな芸術監督とともに特色あるテーマを取り上げて来ましたが、今回芸術監督に就任された津田大介氏はジャーナリスト、メディア・アクティビストとして、ITなどのテクノロ

ジーの進歩が現代社会にどのような変化をもたらしていったかということをテーマに活躍されてきた方です。しかも、今回はこれまでよりもさらに規模が大きくなり、これまで会場となっていた愛知芸術文化センターと名古屋市美術館、そして名古屋市内の町中に加えて、豊田市美術館や豊田市内の町中にも展開されるとのこと、ますます期待が膨らみます。

さて、会場の一つとなっている名古屋市美術館の会場の準備も始まっています。出品作家も大方決まって来て、現段階では、どのような作品をどのようにお見せするかという段階にきています。それに伴いこのところ出品

作家の方々が続々と下見にいらっしゃっています。「情の時代」というテーマがどのように展開するのでしょうか。現時点ではまだ詳細を語れる段階には至っておりませんが、現代における様々な社会問題と親和性の高い作品や芸術作品が見る者にもたらす情報や感情の関係性を問い直すような作品、また現代のテクノロジーの発展がわたしたちの社会や感性に変化を与えるのだろうかといったことを考えさせる作品がみなさまの前にお目見えしそうです。

また、トリエンナーレは毎回教育普及活動にも力を入れています。今回は「ラーニング」

の活動として展開される「アート・プレイグラウンド」が参加できるものとして大変興味深いものになりそうです。会期前に参加できる企画として開催されている「トリエンナーレスクール」にわたしも一度参加しました。各界の専門家から内容の濃いレクチャーを聞くだけではなく、参加者に積極的に議論に参加する場が与えられるのです。様々な人の違った意見を聞くことで大変刺激になりました。トリエンナーレで、ぜひ変化の激しい時代の感性について新しい発見をしてください。お楽しみに！(hina)

郷土の作家たち

松下春雄(まつした はるお／1903－1933)

松下春雄は、大正後期から昭和初期にかけて、若手の美術研究グループ「サンサシオン」の創立メンバーとして名古屋画壇を牽引し、帝国美術院展覧会（帝展）に11回連続入選（うち第13回展は無鑑査出品）を果たすなど、中央画壇でもその実力を発揮した洋画家である。しかし白血病により30歳の若さで急逝したため、画家としての活動期間は10年余りと短い。それでも名古屋の洋画史を語る上で、同じく早逝した佐分真（1898－1936）とともに欠かすことのできない人物である。

松下は1903年3月2日、名古屋市に生まれる。小学校卒業後、明治銀行の給仕として働きながら、夜や休日に絵を描く。15、16歳頃の約2年間（1918-1919年頃）は人見彌の洋画塾で学び、1921年には上京して本郷洋画研究所で岡田三郎助に師事した。1923年の関東大震災の影響で名古屋に戻るようになったが、そこで同年、まだアマチュアであった鬼頭鍋三郎、中野安次郎、加藤喜一郎と「サンサシオン」を結成することになった。サンサシオンは1923年よりほぼ1年に1回展覧会を主催して同人らの作品を発表、また第4回展から一般公募を始めたことで、名古屋における有力な洋画公募団体の一つに成長していっ

どっがおもしろい?!

野水信《コの記号》1966年

鉄 160.0×100.0×100.0 cm



野水信の《コの記号》を取り上げます。2018年10月6日(土)から11月25日(日)までの期間に名品コレクション展Ⅱで紹介したときのご意見です。この折の作品を展示した「現代の美術」のテーマは「美術と文字 文字、記号、物語」です。「コ」のかたちをした記号は、カタカナの文字にも見え、別の何かを表すもののようでもあります。みなさんはどのように見て、感じ、考えたのでしょうか。

「ぱっと見は、何かわからないけど、よく見るとコばかりで、面白い。コは単純な字なのにここまで複雑になるんだ。不思議な作品。」(にしー。さん 32歳)

「コの記号。1つでは自立できないが、コ(個)が重なりあうコトで1つの作品が成立している！ 触れることができないのでイメージでしかないが、冷たく、そして奥の深い作品であると言えるだろうー。」(ちえみさん 42歳)

「コという文字が、いくつも組み合わせることで、1つの作品をつくりあげています。この作品の「コ」とは「個」ではないかと私は感じました。「個」だけでは何か大きなことを成しとげるのは難しいと思います。「個」がいくつもいくつもかさなって、力を合わせることで、この作品のように1つにまとまって、大きなことを成しとげられるのではないのでしょうか。1つにまとまっても「コ」という形は変化せず、「個」として存在していることから、「コ」を大事にしながらも力を合わせる重要さのようなものを感じました。」(Firさん ？歳)

「この「コ」は「個」であるという考えは最初に見たときに考えつきましたが、そこから考えて深めていくとどうにもこの「コ」は支えあっているのではなく律し合っているような印象を受けてなりません。そういった目でこの作品を見たとき、僕にはこの作品が監視社会を表しているように見えました。コという画一的な記号が、まるで異物をあぶり出すための作られた一面のような気がします。」(ウタさん 18歳)

「きっと「コ」は「個」なんだと思う。色々

た（1933年解散）。サンサシオン結成の翌年（1924年）8月、松下は再び上京して辻永に師事、10月の第5回帝展に水彩画《富春園》を出品し、21歳で初入選を果たす。1925年には日本水彩画会第12回展に初入選、第6回帝展に水彩画《五月野茨を摘む》で再度入選するなど、松下はまず水彩画家として台頭した。辻永によると、松下は「初め水彩画に出発して相当認められたが。画壇の将来を觀、自己の意思を発表するのに不十分である事を痛感して」（『SHIMAMOTO NEWS』No. 36、1934年3月）、1928年に油彩画に転向する。同年10月の第9回帝展には、油彩画《草原》で入選を果たし、以後の帝展にも油彩画の出品を続けた。油彩に転向してからは画題を次第に風景から人物に移して、女性像や母子像を多く手がけている。1928年に結婚した妻をモデルにした《花を持つ女》（1931年）は第12回帝展で特選となり、妻と長女をモデルにした絶筆《母子》（1933年）は、画家の没後、未完成のまま第15回帝展に出品されて特選を得た。(nori)



松下春雄《花を持つ女》1931年
名古屋市美術館蔵

な向き、重なり合い、そういう「個」は現実の実生活でも実感。 合う合わないー しっくりくる、こない。 そんな事を考えました。」(ココさん 40歳)

「同じ「コ」を言っているのに、あなたの言いたい「コ」と私の理解した「コ」が重なりながら、違う方向性・重さ・位置を持っています。人間の思いがどれだけ絡み合い、食い違っているのか、この作品には表現されていると思います。」(キョカさん 22歳)

「コが集まり集団になる。つまり家族。」(ピロシさん 46歳)

「コは重たそうだが、案外薄っぺらで、パタンと倒れそうだが、集まって来て支え合う。コは良く似ているけれどピッタリと重なることはなくて、上下四方にバラバラでもない。そして何とか安定している。」(MRさん 50歳)

「「コ」というただそれだけの片仮名が、人を悩ませるような造形性をもっているように感じて来て、おもしろいと思った。私の中では軽めの印象がある「コ」が、鉄板という非常に重々しく、存在感のある物質で作られているのもなんだかアンバランスに感じておもしろいと思った。」(くろださん 19歳)

「どこかの角度から見たらココロ＝心と読めそうな気がしました。鎖のような、心が連鎖していくようなつながる作品だと感じました。重たそうで、軽く、冷たそうで温かみを感じる、人間味のある雰囲気が好きです。」(HSさん 22歳)

「コがいっぱいでおもしろかったのは、にわとりみたいでコッココッコとなっていました。まるでにわたりのなきごえみたいでした。でもまだコのかずをかぞえてません。でもそのコの作品がきれいだなとおもいました。」(さくらさん 7歳)

7歳のさくらさん、目で見た「コ」のかたちが音のかたちとして聞こえてくるんだね。「コ」「コ」「コ」「コ」「コ」と1つずつ目で追って行ったら、鶏の鳴き声みたいに思えたんだ。数を気にしながらだと、そんなふうには聞こえなかったと思うよ。数を確かめるより、きれいだなとおもったことを先に書いてくれたのは、うれしいな。あなたが「コの作品」を見ているときの様子が目に見えるようです。

おとなは、「コ」を「個」として捉えた方が多かったようです。「コ」という単純なかたちが、人の思いを誘う造形性を持っているのはおもしろく、不思議でもあります。

野水信（のみずしん／1914－1984）は、名古屋を拠点にして制作を行った彫刻家です。《コの記号》が「コ」のかたちだけで作られているように、明快な構想に基づいて造形を究める創作を行いました。姿かたちを超えて作品が深く受け止められるのは、作者のよこびととするところでもあるでしょう。(み。)

市ノ木 慶治(しのき けいじ／1891－1969)

本姓は市野木（いちのき）。名古屋市東区手代町（現・筒井二丁目）に生まれる。1905年名古屋第二高等小学校を卒業すると同時に森村組（株式会社ノリタケカンパニーリミテドの母体）絵付工場へ入社、見習い、雇を経て1908年には画工となり、日本陶器（通称：日陶）画工部で働く。同社では職人の絵付技術の向上を目的に技芸科を設け、洋画部においては1909年から鈴木不知、1930年から鬼頭鍋三郎の指導を仰いだ。市ノ木は画学校や画塾で学ぶことや弟子入りの機会こそなかったものの、ここで徐々に実力をつけ1937年から助手の一人を務めた。

1923年11月に鬼頭や松下春雄が結成し、大正から昭和初期にかけて名古屋の洋画壇を牽引したグループ「サンサシオン」の一員として、第3回より出品。光風会にも発表し、1934年に会友、1940年には会員となる。1931年第12回帝展に《密際》を出品し初入選、新文展には1937年第1回から入選を重ね、第4回以降は無鑑査となる。戦後は1947年第3回から日展に作品を発表し、第7回～第11回まで出品依嘱。1957年71歳で初個展を開く。1968年には製陶会社での長年の功績を認められ、愛知県知事賞を受賞。市ノ木のほか、井上武、竹岡良太郎、田中義夫、高木春太郎（晴太呂）らも日陶の支援を経て多くの官展・二

イベントレビュー

サイエンス&アート フェスティバル「アート大会」

昨年の11月3日から4日にかけて、「芸術と科学の杜」白川公園一帯で行うイベント「サイエンス&アートフェスティバル」があり、名古屋市美術館では「アート大会」と題した恒例のイベントを開催しました。今年は幼児から大人まで参加できるワークショップと、白川公園内の野外彫刻を巡るスタンプラリーを用意。1日目は気持ちの良い秋晴れ、2日目は朝から冷たい雨という天気で、残念ながら2日目の午後は中止となりましたが、たくさんの方々にご参加いただくことができました。

今年のワークショップは、小さなボトルの中に色付きのパウダーを重ねて入れ、地層のような構造を作るものでした。科学と芸術のどちらも楽しめるプログラムにしようと、講師の山口百子さんと一緒に内容を考えました。しかし、“カラフルな地層”というアイデアを思いついたものの、地学についてはほとんど知識がない……ということで、科学館の西本昌司学芸員の協力を仰ぐことに。西本学芸員には地層についての貴重な資料を惜しみなくご提供いただき、スタッフ一同の地層に対する興味関心と知識量が倍増しました。

イベントガイド

■特別展

印象派からその先へ

ー世界に誇る吉野石膏コレクション

会期：2019年4月9日(火)～5月26日(日)

料金：一般1,300円・高大生900円・中学生以下無料

吉野石膏コレクションが誇る西洋近代美術の傑作をまとめて紹介する展覧会。大きく揺れ動く西洋近代美術の歴史をミレー、モネ、ルノワール、ゴッホ、ピカソ、シャガールなどの72点の作品によって紹介。

【関連催事】

●記念講演会

日時：4月14日(日) 午後2時から

演題：「吉野石膏コレクションの見どころ、教えます」

講師：佐藤菜々子（公益財団法人吉野石膏美術振興財団学芸員）

●作品解説会

日時：4月27日(土)、5月18日(土)

午後2時から

講師：森本陽香（名古屋市美術館学芸員）

※記念講演会・作品解説会いずれも会場は2階講堂・入場無料。ただし聴講には本展チ

科展・光風会などへの出品を重ね、当地の洋画壇の一翼を担った。

彼の手がけた陶磁器上絵付の多くは花や果物など、輸出先である西欧の好みを意識した華やかな図柄で、写実的で精緻な描写が見られる。その技術は「バラのシノキ」として海外でも高く評価され、個人名によるサインを許された数少ない画工であった。一方、油彩の画題としては明るい日差しが感じられるものを好み、庭先に生い茂る草花や、窓辺で遊びに興じることもの姿などの身近な題材を、奇をてらうことなく柔らかな色味と大らかな筆致で描いた。(3)

*調査にあたり名古屋陶磁器会館より、2015年に行われた市ノ木慶治研究会の資料をご提供いただきました。ここに記して深謝申し上げます。



市ノ木慶治《椅子と少女》1955年

ろうとを使ってパウダーをボトルに流し込んだり、鉾石に見立てたラメ入り糊をボトルの内側に塗ったりする作業は、小さな子どもたちにもできる単純な作業ですが、思うようにいかない事態も発生します。パウダーが水平に重ならずゆがんだり、糊を上手に広げられなかったりして、失敗したように感じる場面も。しかし、地殻変動などで大きく湾曲した地層があるように、自然が生み出す造形は一樣ではありません。少し歪んでいるくらいが本物の地層らしく、ダイナミックに見えます。さらに、パウダーやラメ入り糊の色の組み合わせには参加者ごとのセンスが光り、どの作品も美しい色合いに仕上がりました。完成品の見た目はどれも似ているので、自分のものを判別できなくなるのではという不安をよそに、個性あふれる作品が出来上がりました。

できるだけ多くの方が参加できるように、各回30分完結のプログラムとして組んだ結果、準備や片付けを行うスタッフはてんてこ舞いの忙しさでした。すべての回を楽しく終えることができたのは、いつもこまやかな配慮を忘れず、柔軟な対応で進行を補助してくださったボランティアと、イベントを盛り上げてくださった参加者の皆さまのご協力があったからです。ご参加いただいた皆さまや、イベントにご協力いただいた皆さまに、深く感謝申し上げます。(haru)

ケット（観覧済み半券可）が必要。先着180名

●アートトーク（事前申込制・入場無料）

日時：4月21日(日) 午後2時30分から

講師：山田五郎（編集者・評論家）

会場：中区役所ホール

※詳細は名古屋市美術館公式サイトに掲載。

■常設展 名品コレクション展Ⅰ

会期：2019年4月9日(火)～6月30日(日)

料金：一般300円・高大生200円・中学生以下無料※4月9日(火)～5月26日(日)の期間は特別展「印象派からその先へー世界に誇る吉野石膏コレクション」の観覧済み半券可。

名古屋市美術館のコレクションから厳選した作品を紹介。

■常設企画展 新たなる木彫表現を求めてー平櫛田中賞受賞の作家たちー

優れた木彫作品を残した平櫛田中（ひらくし・でんちゅう）と「平櫛田中賞」受賞作家たちの作品をあわせて紹介。

※会期、料金とも常設展と同じ。

休館日＝月曜日（ただし4月29日、5月6日は開館）、5月7日(火)
展示替期間：4月1日(月)～4月8日(月)、7月1日(月)～7月31日(水)
※詳しくは、名古屋市美術館公式サイトをご覧ください。
<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/> (㊤)

展評

2018年11月17日(土)～2019年 2月17日(日)
ヤマザキマザック美術館

アール・ヌーヴォーの伝道師 浅井忠と近代デザイン

本展は、明治期の日本洋画を代表する巨匠のひとりである浅井忠の作品を、工芸との深い関わりのなかで紹介する展覧会でした。浅井は、パリ万国博覧会（1900年）の臨時博覧会監査官として2年間パリに留学し、当地で花開いていたアール・ヌーヴォー様式の美術工芸品にふれています。工芸デザインに興味をもった浅井は、作陶や陶器のための図案の制作を始め、帰国後には留学中に学んだ知識を生かして京都高等工芸学校で教職に就いています。今回の展示には、浅井が考案した図案の下絵や、それをもとに作られた陶器が並びました。さらに、ヤマザキマザック美術館が所蔵するエミール・ガレのガラスやルイ・マジョレルの家具など、アール・ヌーヴォー

展評

2018年12月15日(土)～2019年 1月19日(土)
豊川市桜ヶ丘ミュージアム

吉澤美香展 1990－2006

昭和から平成に移り変わる1980年代のなかばごろから、活躍めざましい若手の女性作家たちが「超少女」と称されて紹介された。彼らの世代は「新人類」と呼ばれ、従来とは異なる感性や価値観に従って行動することが特質とされている。バブル期まっただなか、男女雇用機会均等法（1985年制定、86年施行）はできたけれど、「超少女」とは女を甘く見ている。そうした時代性を含みながら、このことばも美術用語として使われつつけるのだろうか。吉澤美香（よしざわみか／1959年東京生まれ）は、この「超少女」のひとり。この展覧会の紹介文などで「超少女」の文字を久しぶりに目にして思ったことのひとつである。

桜ヶ丘ミュージアムは増築改修後の平成27年から「現代美術 in 豊川」というシリーズ名で現代美術の紹介を行っている。吉澤美香展はその4回目となるもので、市内の学校でもワークショップを実施するなど、教育普及事業も行われている。

この度の吉澤美香展は1990年から2006年のあいだに制作年が絞られており、この期間に作家の個展を開催していた浜松市のギャラリー・アート・デューンが所蔵していた作品が核となっている。桜ヶ丘ミュージアムも3点を所蔵しており、そのうちの挿図の1点は高校の教科書に図版掲出されたものであるこ

BOOK

『北欧モダンハウス 建築家が愛した自邸と別荘』

（和田菜穂子著、学芸出版社、2012年）



著者は2006年～2008年、デンマーク政府奨学生としてコペンハーゲン大学に留学し、北欧の建築についての研究を続けている建築史家の和田菜穂子氏。本書は、北欧の建築家のうちグンナー・アルブルンド、アルヴァ・アアルト、アルネ・ヤコブセン、モーエンス・

様式を体現する作品も合わせて展示され、当時の潮流を体感できる構成になっていました。浅井の図案を見ていると、チェコ（当時はオーストリア＝ハンガリー帝国）の版画家であるエミール・オルリック（Emil Orlik）の作品を思い起こしました。オルリックは、浅井のフランス留学とほぼ同時期に来日し、日本各地を旅しながら木版画の技術を学んだ版画家です。風景を単純化しつつ、優美な装飾性を残した浅井の図案は、オルリックが日本



浅井忠《グレー風景（陶器図案）》1901年 水彩・紙
京都国立近代美術館蔵

となど、収蔵作家や館の活動の成果を市民に紹介しようとするものでもあるだろう。久しぶりに、しかもある程度まとまった量の作品を見て思ったことは、勢いのある筆遣いで描き出された形態が運動感と浮遊感をもたらしている画面が、新鮮さを失っていないということである。伸びやかさや受ける印象の強さは、今日の若手作家の作り込んだ画面にはないものであろう。興味深かったのは、あわせて紹介されていた豊小学校でのワークショップの成果である。「目に見えないものを想像して描こう」というテーマで隙間に着目して描かれた絵は、空間の非存在をかたちとして捉えるというものである。人や物が空間内で雄型として存在しているなら、それを除いた部分は雌型としてそこにあるわけである。ネガをポジとして捉える体験は、子どもたちに気づきをもたらしたことだろう。これを女性作家ならではの視点と着想といえば、それもまた偏見になるだろうか。（み。）



吉澤美香《るー79》2001年 豊川市桜ヶ丘ミュージアム蔵
写真提供：豊川市桜ヶ丘ミュージアム

ラッセン、ヨーン・ウッツォン、アルネ・コルスモ、スヴェレ・フェーンの7名を採り上げ、彼らの自邸や別荘を中心に紹介している。前書きにも記されているように、北欧の気候は厳しい。夏は短く白夜が続き、冬は太陽が少ししか顔を出さない、暗くどんよとした寒い日々が続く。北欧の人々にとって、そのような四季をどのように快適に過ごすかが長年の課題であり、そこからインテリアや照明器具へのこだわりが生まれてきた。シンプルで飽きの来ない北欧デザインは、今では日本人の憧れの対象となり、北欧ブームともいえる現象を巻き起こしている。著者は、北欧の豊かな生活の根源に、モダン住宅があるのではと述べている。確かにこの本で採り上げられている建築家たちが建てた家は、どれも生活のし易さと美しさの両方を徹底的に追求したものであり、そこに現在にまで繋がっている北欧における暮らしの豊かさの原点を垣間見る気がする。

建築家たちの自邸や別荘は、時に彼らの建築上の実験でもあるが、何よりも家族との温かな時間を過ごすための場所として考案されたものであり、その意味で本書で建築家の家族についても多く記されていることは、我々読者の理解を深めてくれる。アルヴァ・アアルトには特に多くのページが充てられているが、妻との間の心温まるエピソードは、建築家が「理想の住宅」を実現させた背景をも伝えてくれる。（AN）

を旅して制作した風景画とよく似ているのです。ヨーロッパの芸術家たちは日本や東洋の美術を取り入れて新たな様式を生み出し、ヨーロッパに留学した日本人はその様式から学び、生かそうとしました。東西の文化が相互に影響し合うさまが、見えてくるようでした。水彩画、陶芸、家具など多様な作品が並ぶ

展評

2019年 1月 5 日(土)～ 3月24日(日)
静岡市美術館

起点としての80年代

金沢21世紀美術館、高松市美術館、静岡市美術館が共同で企画した「起点としての80年代」を、最終会場の静岡市美術館で拝見した。この展覧会は、多様な美術の動向が見られる現代にあって、そのいくつかの起点は80年代に求められるのではないか、という視点に立ち企画された。その内容は「メディウムを巡って」「日常とひそやかに」「関係性」「記憶・アーカイヴ・物語」の4つのキーワードを設け、19人の作家を紹介している。会場に入ったすぐの壁には、岡崎乾二郎の1981年の《あかさかみつけ》《そとかんだ》といった一連の7つの作品。溶け込むような色彩は作品それぞれに存在感を与え、心地よいリズム感を持って並ぶ。その前には戸谷成雄の石膏の作品が立つ。辰野登恵子の1980年の油彩画に、諏訪直樹の屏風形式の《波濤図》。日比野克彦の段ボールによる作品《SWEATY JACKET》、白く塗られた家具に描いた吉澤美香の作品。ほぼ20代から30代であった作家たちの瑞々しい感覚に満ちた作品は、観る者の感性を大いに刺激する。「関係性」という視点は興味深かった。川俣正、宮島達男、松井智恵、藤本由紀夫を取り上げ、作品と観客、現場と観客、そして時間との関係性を見出し、

CULTURE,MOVIE,DRAMA&MUSIC

KREVA「完全一人ツアー」
2018年12月11日(火) 18：30～
Zepp Nagoya



日本のヒップホップ界の第一人者であり、音楽プロデュースも手掛けるKREVA。KICK THE CAN CREWというグループの一員でもあります。現在はソロを基本に活動し、楽曲制作と発表を行っています。通常のライブではDJやバンドを率いてパフォーマンスしますが、今回ステージには彼だけ。立ち位置を囲むように置かれた円弧状のテーブルに数々の音楽用の電子機材やPCを並べ、それらを自在に操りながら歌い、ラップし、楽曲をすべて一人で届けます。ヘッドフォンを耳に押し当ててレコードを擦るDJのイメージは浮かんでも、あの行動を具体的なかつ正確に説明できる人は多くありません。そうしたヒップホップ音楽に対する

展示室内に統一感をもたらしていたのは、光沢のある美しい壁紙。作品の時代背景に合わせた室内装飾によって、作品を引き立てる空間が生まれていました。これらの作品が、ホワイトキューブの美術館で展示されたら、まったく違った印象を受けたことでしょう。作品と展示空間が調和した美しい展示でした。（haru）

現代の多様化したアートに見られる関係性を考えさせられた。それと同時に「関係性」において成立するアートを美術館はどのように残していけるのか、伝えていけるのかという課題をあらためて突き付けられた思いがした。本展覧会を観覧するにあたり、図録に島敦彦氏が書いているが、「これは1980年代展と称してはいけない」という点をあらためて確認しておくことが大切だろう。担当したキュレーターが現在の美術の動向と80年代とのつながりを探ろうとした企画である。キーワードの設定、また作家選択には多くの議論があったのだらうと想像する。その果敢な取り組みの結果である展覧会によって、作品同士のつながりや登場しなかった作家とのつながりなど、80年代とのさまざまなつながりに気づかされ、興味を深められる機会となった。（I.）



「起点としての80年代」展示風景
写真提供：静岡市美術館

素朴な疑問を、ライブ中に一つひとつ解き明かしていくのです。各機材の特徴や役割、操作によってどんな効果が得られ、どんな音楽表現が可能になるのか、解説とともに丁寧に実践してみせます（先日NHKの情報番組「あさイチ」では、出演者が操作を体験していました）。要所要所で手元の様子をモニターに映し出すため、観客は機材のどこをどう操作したのか視覚的にも確認できます。音楽の基本的な知識を理解し、音の変化を各自の耳で確かめる体験をくり返すうち、それまで意識しなかった微妙な差異をキャッチできるようになります。個々の音の輪郭がより鮮明になり、既知だったはずの楽曲に対して新鮮な驚きが湧くと同時に、これまでの自分の大雑把な聞き方にも否応なく気づかされました。かつてウォーホルが自分の手で描くことなく、写真製版やシルクスクリーンの技術を駆使して作品を発表したように、今は譜面が読めなくても、楽器を演奏できなくても楽曲制作が可能な時代です。とはいえ、実践者より聞き手の方が多いためか、十分に理解されているとは言い難いようです。このツアーで彼は「こんな音楽の作り方もある」と発信すると同時に、「こんな聴き方、楽しみ方もある」と鑑賞の多様性や深め方を示唆したのかもしれませんが。作り手への理解が鑑賞の幅を広げ、聞き手の成長がやがて作品の質をも向上させる。その往還の重要性を、理屈だけではなく直感的に気づかせるために考え抜かれたライブは、美術館における優れた展示やワークショップにも通じるものがありました。（3）

【編集後記】

春です！！！！日差しがやわらかく明るくなってきました。梅が終わり、早咲きの桜があちこちで咲き始めました。そして、目がかゆいです。くしゃみもとまりません。発症してから飲み始めた花粉症の薬の効きは悪く、止まらない鼻水のせいでティッシュを消費するばかり。寒くて暗くて長い冬が終わり、ようやく生き物たちが目覚め、植物たちが芽吹き、あらゆる生命力がほとばしろうとしているこの季節に、なぜこのように苦しまなければならないのでしょうか？まるで現代人のわたしたちは自然からかけ離れていったものとして罰を受けているようにも思われます。人間はもう少し、自然に寄り添った生活をするべきだったのではないかとちょっとだけ反省してみたりしています。

今号の特集では画家の仕事とマネーの関係について解き明かしています。壁画のように物理的に絵を売ることができない大作をたくさん制作していたリベラのマネー事情は、作品が生まれた時代背景もあぶり出し、大変興味深いです。今も昔も作家として生計を立てることの厳しい現実是不変変わらないのだらうなあとと思います。（hina）

アートバーバー第110号 発行日：2019年 4月 1 日

発行 名古屋市美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄[伏見駅・大須観音駅・矢場町駅]下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜日（祝休日の場合は翌平日）
年末年始
開館時間：午前 9 時30分～午後 5 時
祝日を除く金曜日は午後 8 時まで
※入場は閉館の30分前まで

 Nagoya City Art Museum